

| | |
|------------------|---|
| Title | 巻頭言 |
| Sub Title | Foreword |
| Author | 蟹江, 憲史(Kanie, Norichika) |
| Publisher | 慶應義塾大学湘南藤沢学会 |
| Publication year | 2019 |
| Jtitle | Keio SFC journal Vol.19, No.1 (2019.) ,p.4- 6 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 特集 SFC×SDG |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1901--004 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻頭言

特集 SFC × SDG

KEIO SFC JOURNAL Vol.19 No.1 特集編集委員

蟹江 憲史

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授

SDGsの発想は、SFCの発想そのものである。設立から25年以上を経て、ようやく社会がSFCに追い付いてきた。1期生としてSFCで学んだ立場とすれば、「未来からの留学生」が未来に戻り、当時学んだことがまさに今起きていることだという感が強い。当時の教授陣の先見の明に改めて敬服するのが実感である。

このように言える理由は大きく三つある。

一つは、「未来からの留学生」という発想に代表される、未来からバックキャストで今の課題を明らかにするという発想法である。SDGsには、(主として)2030年までに達成すべき17の目標と、それらを目標達成年や数値目標を含めて、目標毎により具体的な目指すべきところを示した「ターゲット」が掲げられている。求められるのは、それらの目標とターゲットの視点から、今ある問題を明らかにし、問題解決を行うことである。

未来にあるべき姿を描くことで、今の課題がより明らかになる。今の課題を今の社会構造や社会状況を前提にして眺めると、「だから問題解決が難しい」ということがわかるが、ではどうすれば解決できるのか、というところにはなかなかたどり着かない。問題の分析には役に立つが、必ずしもそれは問題解決を導かない。SFCが出来た理由もそこにあったはずである。第三者として分析するのは世の中は進まない、問題解決に焦点を当て、問題解決を行おう、と。

未来の視点から問題を見つめなおすと、あるべき姿がクローズアップされ、今のしがらみが余計なものにさえ見えてくる。ましてや、学生たちのフレッシュな頭でこれを見ると、様々な問題解決方法が見えてくる。

SDGs と SFC が同じ発想であるという理由の二つ目は、まさにこの点に関係する。自律・分散・協調のシステム思考である。1990 年代初頭の SFC では、自律分散協調のシステムという話があらゆる機会に出てきていた。繰り返し聞くうちになんとなくイメージが出来てきた気がするが、25 年以上経って、それを世界規模で実装しようという試みが SDGs である。

SDGs の期待する問題解決方法は、自律分散協調にある。中央集権的にルールをつくり、そのルールを実施する、という従来の「ルールによるガバナンス」に頼るのではなく、目標を作るがルールは作らず、ルールの実施は各国やステークホルダーの自律分散協調行動に任せるという「目標ベースのガバナンス (governance through goals)」である (Kanie and Biermann, 2017)。グローバルガバナンスの手法として、これほどまで大規模に国連が「目標ベースのガバナンス」を導入したのは、歴史上初めてのことである。目標は共有する一方で、実施の進め方は各国やステークホルダーのやりやすいやり方で行う。これにより、自由な発想やイノベーションを生かしていく。唯一導入したメカニズムが、「測る」という点である。本特集で植原・村井論文も測ることの重要性を主張しているが、測ることで、自律分散協調が機能していく。

SDGs 設定プロセスの中で国際研究プロジェクトを立ち上げ、その成果としての上記出版物の中で、「目標ベースのガバナンス」の新規性や可能性を理論的に明らかにした。2013 年初頭には SDGs 交渉の議長をはじめとしたカギとなる交渉担当者を集めたワークショップを何度も実施し、自律分散協調で SDGs を進めることの重要性を明らかにしたことで、目標を共有しながら実施は各国やステークホルダーが自由に行う、というガバナンスの発想が「2030 アジェンダ」にも導入された。

その後 SDGs による目標ベースのガバナンスの実施メカニズムを明らかにすべく、2017 年には xSDG ラボを立ち上げ、翌年にはステークホルダーと共同の研究コンソーシアムとして xSDG コンソーシアムを立ち上げた。SFC の研究メカニズムは、自律分散協調システムを明らかにする仕組みを提供してくれている。

SDGs と SFC の発想の同一性を表す第三のポイントは、総合的思考である。いうまでもなく、SFC には総合政策の発想がある。総合的に考えることで、

初めて課題解決が可能になる。未来からの発想で明らかになる問題の多くは、タテ割りの弊害を乗り越えることで解決する。解決方法は仕組みや制度改革もあれば、科学技術イノベーションもある。一見多様に見える解決方法だが、共通点は「総合的な問題解決」である。

SDGs もまた、総合的な問題解決が必須である。17 目標、169 ターゲットは、その一つ一つが独立したものではなく、一つのパッケージであるという趣旨のことは、SDGs を含む国連のアジェンダ「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に繰り返し登場する。目標をひとつだけ達成するのであれば、おそらく誰もが何らかのことをやっているであろう。二酸化炭素を大量に排出する低効率な石炭火力発電所で発電をしても、エネルギーのアクセスを高めるターゲット 7.1 には貢献する。しかし、気候変動対策推進の目標 13 の観点を含めるならば、これでは問題解決にならない。目標 7 も目標 13 も、そして他の目標に対しても整合性のある問題解決方法を考えることが、SDGs を考えることになるわけである。

その意味では、SDGs は総合政策を可能にするためのツールを提供してくれたということも可能である。しかもそのツールが世界共通言語であることの意味は大きい。SFC だけではできないことが、広がりをもっていく。

SDGs は SFC から 25 年以上遅れ、ようやく社会に実装された新たなツールである。このツールを使いながら、今度は我々が 25 年先を見つめ、「SDGs のその先」にある社会を創り、そしてそこで役に立つ発想を生み出す番である。

参考文献

Kanie, N., and Biermann, F. (Eds.) (2017) *Governing through goals: Sustainable development goals as governance innovation*. MIT Press.